



TITLE:

宇宙物理學教室便り

AUTHOR(S):

CITATION:

宇宙物理學教室便り. 天界 1927, 7(81): 511-511

ISSUE DATE:

1927-11-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161203>

RIGHT:

宇宙物理學教室便り

十月二十日(木) 午後、新城教授の案内で、荒木總長花山山を視察さる。

同午後三時半より第四回雜誌會

Otto Struve: Interstellar Calcium

.....竹田新一郎君

R. Emden: Thermodynamik der Himmels korperの紹介.....福本 正人君

十月二十七日(木) 午後三時半より第五回雜誌會。

量子論軌近の趨勢(4). ボール、クレイマス及びスレーターの『假想場』の考へを、クレマス及びハイゼンベルグのツエルストロイウングの理論.....

.....荒木 俊馬君

隕石探索——去る十月十八日午後兵庫縣加古郡野口村の近所に一大爆音と共に隕石が落下したと言ふ報知がさざいたので、十一月一日山本教授は同地に同隕石を探すべく向つたが、何分時日が可なりたつた後だつたので、わからなかつた。

十一月四日 十月十日の水星の太陽面通過は、内地では其の第三及第四の接觸が見られないので山本教授は、10センチ屈折ミクロンメーターをもつてそれが見える臺灣地方に出發。

十一月十日 水星の太陽面通過。

朝から天文臺は異常の緊張であつた。可なり晴れては居たが、頻繁に去來する斷雲に心配しながらも、各員その分擔についた。十二時屈折中村要、七時屈折上島昇、十時反射上田助教授、十三時反射伊藤謙吾、それに四時の中村反射鏡に學生諸君が四五人取りついた。

十二時、彌々初觸の時間が切迫するにつれて、益々緊張したが、生憎、斷雲は益々、頻繁に太陽の近所を逍遙する。十二時半、丁度さしかゝつた雲が太陽面を覆ふたが、それでも、一瞬の雲の切れからでもさ、各員一齊にクロノメーターを讀み呼吸を沈め、或はサンガラスでのぞき、あるいはプロセクションで、水星の出現をまつたが、豫報時すでにすぎてしまつてみな力を落した。而もその時雲は切れて美しい太陽面は見えたが、水星はすでにその一部を太陽面にあらはしてゐた。さて第二接觸である。今度こそはミクロノメーターを讀み息を殺したが、恰も惡し、大きな雲は又無慘にも太陽面をかくした。二分三分四分五分、やつと雲が晴れた時、水星は眞黒な圓形の姿を悠々太陽面に現はしてゐた。而も、中天より西天にかけて悠久の空は洋々横つてゐる。七時屈折及十時反射ではつぎつぎに幾つかの寫眞をまつたが、現象するやまちかまえてゐた新聞記者達がその幾つかを借りて行つて仕舞つた。

三時頃まで時々雲の來る外充分見物するこゝが出来た、地上に十三時に依る大きなプロセクションには學内學外の多くの見分人がたかつてゐた。

十一月十一日 臺中の山本教授より『ハレカンソクセイコウヤマモト』なる電報を得た。これで日本に於ける水星の太陽面通過の觀測は成功した。